戦前・戦後の教育実践を語る

―報徳教育・福沢プラン・井上喜一郎―

須　田　将　司*

本稿は、戦後新教育「福沢プラン」について、その基盤となった戦前の報徳教育およびその後の実践の展開を捉えるべく行った聞き取り調査の記録集である。以下の4点が明らかとなった。①戦前の報徳教育をリードした米山要助校長が戦後「福沢プラン」を形成する井上喜一郎を招いたこと、②報徳教育の「芋こじ」の理念をベースに戦後新教育を模索していった井上喜一郎校長や福沢小教員集団の姿、③「芋こじ」以来の話し合いの重視が子どもの「主体的必然性」の育成につながったこと、④話し合い学習により知識や価値観が動く「可動的均衡点」という授業論が生み出されたこと。ここから、話し合いや関わり合いを追究した教育実践が、戦前・戦後を貫き「深化」していった姿を見出すことができる。

キーワード：井上喜一郎／報徳教育／福沢プラン／主体的必然性／可動的均衡点

はじめに

本稿は、戦後新教育「福沢プラン」の教育史上における存在意義を再考するため、その前後の教育実践に射程を広げて行った聞き取り調査の記録集である。

二宮尊徳生誕地に隣接する福沢小学校では、1938（昭和13）年度に報徳教育の第一人者・米山要助校長により全村教育的な実践が展開し、国民学校令期には錬成論と適合しつつ児童常会・母子常会などの実践が展開された[1]。この過程で至誠・勤労・分度・推譲や「芋こじ」といった報徳思想の理論や方策が学校教育実践に転化されており、戦後に校内昇進で校長となった井上喜一郎は、それらを手掛かりに民主教育を模索したことがわかっている[2]。井上喜一郎校長がリードする初期社会科としての実践は、1951（昭和26）年に『農村地域社会学校』として、さらには経験主義的な社会科への批判や障害児教育、道徳教育といった諸問題にも向き合った成果が1960（昭和35）年に『「わかる」ことの追求』としてまとめられている[3]。その実践に根ざした研究は井上喜一郎が転じた松田小学校で理科・社会科両面にわたる授業研究として展開し、「松田小方式」、「可動的均衡点」という独自の教育理論[4]、そして「社会科の初志をつらぬく会」や「全国初等理科教育研究会」を担う実力派教員を輩出するに至る。

福沢小に関わった者による回顧はこれまでも複数行われてきており、最も早いものは1960（昭和35）年10月刊行の『「わかる」ことの追求―』に所収されている井上喜一郎の福沢の教師の十五年」と、指導者として携わった浜田陽太郎を司会に以下の12名による「旧職員座談会」である[5]。

安藤初麿（在職：昭和 13.3.3～32.11.1）
宇佐美安雄（昭和 20.9.30～25.8.31）
大鐘新平（昭和 21.9.30～27.4.1）
草柳（遠藤）君子（昭和 22.4.30～30.3.31）
渡辺（高橋）冨美恵（昭和 22.7.31～25.3.31）
石田（永田）則子（昭和 23.3.31～30.3.31）
田代義男（昭和 24.3.31～27.4.1）
石川滋（昭和 24.3.31～26.4.1）
山口金治（昭和 26.4.1～30.3.31）
森谷美登利（昭和 25.11.30～27.4.1）
小野謙司（昭和 27.4.1～30.3.31）
梅原福司（昭和 27.5.1～29.3）

その後、神奈川県南足柄市史編纂の過程で1991（平成3）年7月11日に10名の元教員を集めた座談会が行われ『市史研究あしがら』に掲載されている[6]。前出の井上喜一郎、安藤初麿、大鐘新平のほか、

＊すだ　まさし　東洋大学文学部教育学科

ここで新たに以下の7名の証言が得られている。

加藤フク(在職:昭和 13.3～37.3)
石田公夫(昭和 23.3～37.3)
露木喜一郎(昭和 24.3～33.3、44.9～45.4)
関　弥一(昭和 25.3～27.6)
瀬戸清治(昭和 25.3～40.4)
杉田眞(昭和 30.3～40.4)
中津川裕安(昭和 33.3～41.9)

なお管見の限り、このうち加藤フク氏の回顧談(2006年8月18日)、露木氏の回顧談(1985年、1990年11月13日、1995年2月20日、2003年8月28日)を確認している[7]。また、南足柄市史編纂事業では、これ以外にも戦前の福沢小学校長・米山要助のご子息・湯山厚氏にも聞き取りを行い、戦前の福沢小の姿に迫る貴重な証言を得ている(その内容は第1節で後述)[8]。

一つの学校の実践について、これほど多く当事者による証言が残されている事例は稀である。しかしながら、それらは昭和20年代の『農村地域社会学校』刊行前後の姿に集中している。もちろん、それが初期社会科実践史上に遺すべき価値を有していることは言うまでもない。だが一方でその枠組みが、基盤となった報徳教育の存在や「松田小方式」にまで至る教育実践の模索を一連のものとして捉える視点を閑却してきたともいえる。むしろ戦後新教育「福沢プラン」の形成過程や問い返しを含む地道な足取りを辿ることこそ、教育学・教育史・社会科教育の研究上に意義ある知見が得られるのではないかと考える[9]。

こうした射程で福沢小の戦前・戦後の教育実践を通観するとき、1938年から1963年まで在職した井上喜一郎校長の姿がクローズアップされてくる。筆者は2010年度以降、〔井上喜一郎文書〕を発掘[10]する一方で、元福沢小学校長・一寸木肇氏や早稲田大学・露木和男氏の協力を得て、前出の湯山厚氏や松田小で井上校長を支えた社会科主任・松本健嗣氏と理科主任・小林清氏への聞き取り調査を行った。彼らはみな「福沢プラン」の前提に報徳教育を、その後の展開として「松田小方式」を挙げる点では共通しており、本研究の趣旨に添った貴重な証言を得ることができた。本稿では、今後の本格的な検討への素材とすべく、それらの証言・知見をここに収録するものである。

なお、録音から書き起こした原稿を、本人および同行者(一寸木氏・露木氏)に事実関係や内容の確認を頂き、最終的に筆者の文責でとりまとめた。

1、戦前の福沢小校長・米山要助氏を語る

(1) 解説

湯山厚氏は1924(大正13)年生、米山要助校長の三男であり、幼少のころ湯山家の養子となった。神奈川県師範学校を経て、敗戦直後の1945(昭和20)年10月1日に国府津国民学校訓導となる。学校劇や国語教育に造詣が深く、著書『学級づくりの仕事』(明治図書、1959年)、『構成劇の作り方』(晩成書房、1985年)がある。1969年12月に退職後、卒業文集の印刷製本工場を営む傍ら、日本演劇教育連盟委員としても活躍、都留文科大学や駒澤大学の講師を歴任した[11]。

湯山氏は、前掲の南足柄市史編纂の聞き取り調査で、戦前の村長「市川実太郎(中略)とおやじがくっついて、狭い郷土教育というような話に値するかわからぬけれども、いわゆる極めてローカルなコミュニティースクールの構想が出てきた」との回顧がある。本調査ではこの点に更に踏み込み、ご子息からみた米山要助の仕事・エピソードについて振返っていただいた。そこには、紆余曲折を経て教員の道を歩んだ姿、面倒見のよい姿、『赤い鳥』や自由教育に取り組んだ姿、井上喜一郎の人物を見出して福沢小学校へと招いたことなど、文字資料には残されていなかった貴重な情報を得ることができた。

(2) 湯山厚氏への聞き取り調査

日時:2010年11月13日
場所:話者自宅
聞き手:須田将司、一寸木肇(当時:上大井小学校長)

①米山家の経歴・系譜

湯山:僕の祖母は二宮金次郎の本家から嫁に来ている。また、僕は四つの時に湯山家に養子に来ている。父親・米山要助に「猿山の伯母に慰めに行って来よう」と誘われた。その日は小田急の開通式で、兄弟はみなそれに出かけていた。父親が私を連れて出かけようとするのに対し、母親は本能か、ものすごく反対したのを覚えている。手を引かれて田んぼ道を歩き、イナゴが飛び出したこと、蓮華の花が咲いていたことなどをかすかに覚えているが、父親とどんな会話を話したのか全然覚えていない。

一寸木：二宮金次郎の血を引いていらっしゃるのですね。湯山先生は米山要助氏の何番目の子になるのですか。

湯山：男が四人いた。僕は三番目。昔は分家させるほどの余裕もないから養子にやるというのはそれなりの得策だったのですよね。

僕の父親（米山要助）は農家の長男。体も小さかったし、将来は百姓にと考えていたところ急に身長が伸びてしまった。農家にとって兵隊にとられるのは働き手を何年かとられることだから、田植えの時期など大変困るので、兵役を逃れる意味で師範学校進学の話が出てきた。師範学校は3か月から半年兵役をやればよいという恩典があった。それで、普通の人よりも2～3年遅れて入学した。それが教育界へ入った動機というわけですね。

一寸木：先生の時代は鎌倉だったのですよね。僕たちは横浜だったわけですけれども。

湯山：鎌倉です。神奈川県師範学校、県立だったわけですね。「かまし」って言っていたけれども、父親が通っていたころは、学校らしい学校がなかった。父親は年齢が上だったのでみんなの面倒を見ていたらしいのだが、同級生には神奈川師範始まって以来の優等生が集ったという。内藤卯三郎（愛知教育大学初代学長）、詩人の福田正夫、柳田謙十郎など。

戦後、柳田謙十郎が共産党に入った時、親父が「なんだ柳田、共産党にはいったのか」と言ったら、柳田が「おまえに話してもわからん」と。父親も「そうだな」と答えていた。

一寸木：豪快なお父さんですね。

湯山：だけど、最年長だったのでみんなの面倒をみていた。

②米山要助氏の仕事
—桜井小・福沢小・東京都・戦後の村長—

一寸木：以前、米山要助氏が戦中、東京に行っていた話を聞いたことがあったのですが。

湯山：父親は桜井小学校で非常に大きな報徳教育の全国大会の主催をした。当時の桜井小学校は宗繁寺の隣に傾きかけた校舎があって、上郡一の小さい学校だった。小さい学校の校長だけど一生懸命やって、随分集まった。僕の娘が岐阜県の瑞浪に嫁に行っているのですが、そこに出入りしているおじいさんが「私は米山要助先生の講演を聴きに行きました」というほど。そして桜井小学校から福沢小学校に行った。福沢村の怒田に市川実太郎という篤農家がおりまして、その時報徳教育に関心をもっていた。それで、学校を含めて報徳教育で村おこしをしようと考え、父親を引き抜いたのではないかと思う。

写真 1：米山要助（左）と市川実太郎（右）

※福沢小学校蔵、1939（昭和14）年

また、報徳教育の関係で梨本宮と関係のあった広橋真光と知り合い、その関係で福沢小学校の校長から東京都社会教育課主事に転出するわけです。その頃（昭和14年末～15年）いわゆる戦時体制、隣組制度を作る。その時の隣組の心得などのハンドブックを父親（米山要助）が作成した。昔の五人組の制度を、銃後の守りを固めるために生かすという。その際、あの「とんとんとんからりと隣組」の作詞を徳川夢聲のところにたのみにいったそうだ。作曲は飯田信雄のところに頼みに行ったのだと。さりげなく話すからね、あまり自慢話をしない男だった。

須田：広橋真光とはどのような関係だったのでしょうか。

湯山：島根県の知事じゃないけど…、県に籍があり戦前は内務省の高級官僚だった。

須田：その方が東京に来いと。

湯山：おそらくその招きで東京に行っていると。当時、県視学が「お前は福沢小学校ではもったいない」と、その頃上郡で一番大きかった山北の川村小学

校の校長に、という話をしていた。それを父親が丁重に断っていたのを、隣の部屋で私は聞いていました。弟（米山磐氏）は、ところが東京では社会教育課主事と言いながら東条英機の私設秘書だったのではないかと言っています。正確には父親も話さなかったからわからないけれども。

話はとびますけれども、終戦は8月15日ですよね。13日の日に父親が帰ってきた。「御前会議が長引いて」と。

一寸木：御前会議に出ていた？

湯山：出てはいないと思いますけれども。それで日本が負けたと。「家から一歩も出てはいけない」と言って8月14日は足止めをくっちゃったのを覚えています。僕は日本が負けたというのを8月13日の夜に知ったわけです。

一寸木：その時はもう決まっていたわけですね。

湯山：それで、東京都の役人をやめて、まぁ事情があったので、大政翼賛会ですから。本来は公職追放なのだけれども。あれは文献かなにかが大概証拠になるのだけれども、親父は報徳教育などで随分講演をやったり、何か文章を書いている。ところがそれはみな古屋安定さんの名で出しているから追放にはならなかった。

一寸木：古屋安定さんというのは。

湯山：桜井小学校の教頭だった。上郡には二宮先生研究会というのがあった。児童が一円ずつ善種金といって納める取り組みなども行った。その時の会長が古屋安定さん。

一寸木：お父様はゴーストライターに徹したと。

湯山：そうですね。名前を出していれば公職追放だったでしょうね。

一寸木：古屋先生は公職追放の憂き目に。

湯山：古屋さんはならなかったのではないかな、定年間近だったのか。

一寸木：戦後の福沢プランには直接かかわったのですか？井上喜一郎先生との関係などは。

湯山：その媒介項となるのは奥津重輝。杉田真の父親です。米山要助のあとは奥津重輝さんが引き継いで、ところが定年間際だったので、実際には戦後の福沢小を担ったのは井上喜一郎だった。彼は結核で休職したりして、周囲から雇い続けることに疑問の声もあったらしいのですが、父親は「あいつは人の倍仕事する」と言ってかばった。福沢に行っても同僚でしたね、やっぱりね。

報徳教育がもとになって、戦後みんなぱっと切り替わるでしょう。社会科中心のコア・カリキュラム。教科とは、周辺教科とは何かなど言っていましたね。それで、井上喜一郎の福沢小学校が農村部。コア・カリキュラムの東京版が樋口澄雄といったかな。

須田：東京の桜田小学校。

湯山：公立は桜田小学校。私学は確か、和光学園、海後勝雄さんが校長。あのころは大学教授になるべき人間が私学の小学校長をやっていた。

須田：米山要助校長は戦後の社会科がはじまった時、井上喜一郎先生たちと関わりは。

湯山：いわゆる社会科教育は、米山要助が戦前に福沢に井上喜一郎を連れて行ったことがもとになり、中間項に奥津重輝が入って、実際にはすべてプランニングは井上喜一郎がやった。随分派手に全国大会をやっていますよね。

須田：その後、米山要助氏は桜井村の村長に。その村長時代に、福沢小学校についてコメントしていたことは？

湯山：おそらくないでしょうね。

須田：東京時代の仕事の話は残っていますか。

湯山：あまり自慢話しなかったからね。大磯に島崎藤村を訪ねたり。それから八王子の奥にも、あの大菩薩峠の中里介山を訪ねています。大政翼賛会の頼みでしょう。

須田：そうすると大政翼賛会の仕事をかなり請け負っていたという。

湯山：あのころは全部、大政翼賛会に入らなければね。それから、どういう風に政府とつながっておったのか、東京都の社会教育主事でありながら国政とかなりつながっていたということは言える。政務次官とか事務次官などの次官会議の連絡をしていたらしい。東条総理大臣の秘書として。そういうことはちょっと言っていた。聞いていたのは僕と、米山磐との二人。幼かったからあまりよく覚えていない。

須田：東京都にいったのは佐々井信太郎氏とのつながりかと。

湯山：つながりはあまりなかったようだ。佐々井信太郎さんはまじめな研究家で評価していた。しかし加藤仁平氏は評価していなかった。京都大学の下程勇吉氏も自宅に訪ねてきたのは覚えていますけれども、父親はあまり歓迎しなかった。だが加藤仁平さんとは付き合ってはいた[12]。

③福沢プランを受け継ぐ流れ

一寸木：社会科の話ですけど、初志をつらぬく会についての関係などを教えてくだされば。

湯山：コア・カリキュラム連盟が生活教育連盟になっていく。埼玉大学の川合章、海後さんなど。

一寸木：上田薫などは。

湯山：上田薫さんは良心的だった。長坂端午、重松鷹泰。重松鷹泰は文部省から名古屋大学に。勝田守一さんは東大に行き、それから教科研の方に行ってしまう。城戸幡太郎さんが戦前に作っているのですよね。いわゆるアメリカのプラグティズム。デューイあたりを。一方、右というかがコア・カリキュラム連盟。強いて分けると左が教科研というか。

一寸木：初志の会はどこに位置づくのですか。

湯山：結局、コア・カリキュラム連盟にも物足りない。ちょっと違うというところから出てくるのではないかと思います。私から見れば、教科研のほうではなくて、石山脩平さんの初志を継ぐというわけですね。

一寸木：松本健嗣先生は昔、福沢小学校にいて、井上先生の薫陶を受けているわけですよね。なおかつ初志の会をある意味で現在まで引っ張ってきた人ですよね。

湯山：松本先生は、僕にやや近い、左ではないけれども、ちょっと違うタイプだった。むしろ、井上喜一郎というのは非常に要領のいい印象。報徳教育の一番最後というのは、あとかたもなくなってしまうのだけれども。松田では、あの人は要領いいから理科と両股かけていましたね。井上喜一郎の社会科の部分を引き継いだのは松本健嗣で、理科の部分は小林清ですね。僕の分析が違っていなければ。

須田：宇佐美安雄先生は。

湯山：福沢小学校では井上喜一郎の一番の子分だった。それで、井上喜一郎が桜井の小学校にやったという感じ。宇佐美先生は非常に勉強家ですよ。井上さんがやはり桜井小学校というのはやっぱり報徳教育をと。当時ははっきりとはやっていなかったけれども、宇佐美安雄であとを継がせようと考えたのでは。そういう点では、米山要助と井上喜一郎と宇佐美安雄とはつながっている。

④米山要助氏の横顔

須田：米山要助氏が報徳という時によく語っていた言葉は。

湯山：一円融合会の佐々井典比古さん、神奈川県の副知事をやった人、大変能吏で人格者だった。米山要助は典比古さんを評価していたことは確か。変な風に二宮尊徳を担ぎまわさない。アカデミックに取り上げるという点で。

また父親は音楽が得意だったようで『赤い鳥』なども読んでいたようだ。その頃、課題作文に対し自由作文を北原白秋が始める。父親も子どもに詩を書かせて、自分は作曲をして子どもに歌わせる実践をしていた。しかし、家で歌うなと。文部省は教科書以外の歌を歌ってはいけないことになっているから。

須田：そういう意味では米山要助氏は自由教育の実践者でもあったわけですね。

湯山：きちんとしたイデオロギーなどはなかったけれども、白秋の影響は受けています。それと、書画、美術に対しても興味があった。牧雅雄という彫刻家・画家の絵が桜井小学校の校長室に置いていた。平塚の骨董屋にも出入りしていた。

須田・一寸木：今日はありがとうございました。

2、「芋こじ」を土台とした「福沢プラン」

(1) 解説

松本健嗣氏の経歴は、その著書『「未熟もの」としての教師―失敗から学び続ける―』巻末によれば以下の通りである[13]。

> 1931（昭和6）年生まれ、神奈川県中井町立中村小学校を振り出しに、足柄上郡内の小学校を異動し、最後は中井町立井ノ口小学校長として定年をむかえる。（中略）福沢小学校、松田町立松田小学校で戦後教育の開拓者として名を馳せた井上喜一郎校長の薫陶を受けた。また、「社会科の初志をつらぬく会」に入会し、上田薫、重松鷹泰、山田勉、市川博、影山清四郎の諸先生や全国各地の気鋭の教育実践者や研究者などから強烈な影響を受け、子どもの世界の奥行きの深さと豊さに眼をひらいた。

松本氏は福沢小学校に1959（昭和34）年度から1963年度まで在籍し、1964年度からは松田小学校に移り、井上喜一郎校長のもとで社会科の実践研究を深化させていった人物である。福沢小時代・松田小時代の記憶を中心に、井上喜一郎校長の教育哲学や授業論・教師論まで幅広く語っていただいた。

松本氏は自身の国民学校児童の記憶を振り返り、奥津重輝訓導（後に福沢国民学校校長）の授業に報徳教育の「芋こじ」の理念を見出している。そこに指摘されている限界性と教育理論・実践としての可能性から報徳教育をベースに戦後新教育を模索していった井上喜一郎校長や福沢小の姿が浮かび上がってくるようである。夜通し話し込む福沢小の教員集団、協力的な保護者の姿、「主体的必然性」にもとづく話し合い活動や学級経営の姿。これらには、互いに関わり合い、高め合うことへの追究を見出すことができる。松本氏は、ここに「おれが教えてやる」に堕しやすい教育実践への警鐘をも重ね、普遍的な意義を見出している。

いわば戦前・戦後における「芋こじ」教育の系譜ともいうべき流れは、本研究上における報徳教育・「常会」実践の歴史的存在意義の検討に際し、当事者性の高い証言として重要なものとなった。それと同時に、授業論や教師論としての広がりを有することもまた示唆されたといえる。

（2）松本健嗣氏への聞き取り調査

日時：2011年3月2日
場所：話者自宅
聞き手：須田将司、露木和男（早稲田大学）

①奥津重輝先生の記憶
—「芋こじ」を生かした教育—

松本：私は奥津重輝先生の授業を直接受けた。その時の授業のなかに、後になって考えてみると、「芋こじ」の思想が生きているように思う。1942（昭和17）年、国民学校5年生で国語の授業を受けたのだが、そのやり方が報徳教育の思想を表した授業ではなかったかと思う。今考えると非常にユニークな授業だった。要するに、教師が一人ひとりを育てるのではなく、一人ひとりが一人ひとりを育てている。これが「芋こじ」の精神だと思う。しかも、それが戦時中に行われていたということは驚くべきことだ。

写真 2 福沢小第10代校長・奥津重輝

※福沢小学校『開校百周年記念誌』2001年

報徳思想の根底にあるのは、人間は一人ひとりがよさをもっているということである。それを互いに見つけ、磨きあっていくのが、まさに授業であるという考え方である。戦後教育のなかに話し合い学習が方法として取り入れられたが、それほど深く教育活動のなかに根付かなかった。それはひとつの知識を教えるため方法としての話し合い活動である。話し合いはあくまでも方法・手段。ところが「芋こじ」の精神と云うのは、磨き合うこと自体に意味がある。話し合いながら、お互いが磨き合っていく。その過程で、友だちを見直すことができる。「ああそうか、いい考えしている。あの子にはいじわるされているが、見どころがある」と。話し合いをしながら意見の対立が生まれると、資料をもう一度読み直してみる必要が生まれる。あるいは自分の考えの浅さに気づき、自分を見直す。このように話し合いの中で友達に問いかけたり、自分に問いかけたり、教材に問いかけたりしながら自分の考えを新しく組みたて直していく。それは奥津先生がやられた「芋こじ」学習のなかに色濃く思想として流れている。国語の授業のなかでグループ学習をやったのにはそういう意味がある。単なる手段ではなく。今見直してみても、戦時下に奥津先生の授業を受けられたのは幸せだったなと思う。戦後華やかに導入された話し合い学習があまり有効に生かされなかったのは、話し合い学習の精神を深く考えなかった現場の責任だと思う。

②戦前の児童常会の限界性から考える

松本：戦前の子どもたちは息苦しくなかったのかなという気がする。常会の話し合いのなかで親から認めてもらったり、お互いにいいところを認め合ったりが行われたそうだが、何か一つの望ましい人間像みたいなものを目指していたように思う。もし、夏目漱石の「坊ちゃん」みたいな、おもしろくないから尻まくってやる、という子どもがいたとしたら、はじきとばされてしまう。じっとしていなければいけない。そういう息苦しさが無かったのかな。当時の子どもの証言がないからわからないけれど（戦前の）。そんな心配が一つある。それは一つの時代のもつ限界だったのではないかと。

しかも、現在も私もそういった教育に陥りやすい危うさをもっている。昔も今も教育とは子どもを育てることだ、と信じて疑わない。つまり、子どもを操作の対象として見ている。「こういう指導をすれば、こういう教材を与えれば、子どもはこうなる」と考え、子どもそのものの内面には向かっていない。しかし、子どもは育てるものではなく、育つものなのだ。そういう力を本来もっている。だから、教師や親は子どもが本来もっている育つ力というものを十全に育てられる場を用意してやることしかできない、という自覚のもとに子どもを見ないといけない。

有名なイタリア料理の有名なシェフが、「料理人は食材を引き出すのではなく、食材が本来のうまさ、良さをもっているから、料理人はそれを迎えにいくだけだ」と言っている。「食材の味をつくる」、なんてとんでもない。本来食材がうまさを持っているのだ。一流の域に達した人はそう考えているのかと頭のさがる思いがした。教師も子どもに謙虚でなければならない。「おまえら教えてやるのだ」と、そういう謙虚さを失ったときに、教育は荒廃に向かうのだと思う。

③職員間の「芋こじ」的雰囲気

須田：かつて露木喜一郎氏に、職員室に「芋こじ」的雰囲気があったと伺ったことがある。この点についてのご記憶はありますか。

松本：まだ宿直制の時代、毎日誰かは宿直室に泊まるが、決して一人じゃない。必ず何人か残って、酒を飲みながら教育談義をしていた。「今日、こういう指導をしてみたら子どもはこうなった」、「いや、その場合はこうしたらいい、おれはこうしている」と色々教え合い、熱く語り合った。そういう雰囲気の中で新たに意欲が湧いたり、次の日に試してみたり。要するに「芋こじ」ですよね。もちろん職員会議のときも話し合いはするのだけれども、それよりも宿直室での話し合いが一番、鮮明に残っている。そういう雰囲気が福沢小にも、松田小にもあった。私はそういう雰囲気を幸いにも味わうことができた。宿直制がなくなって、学校がある意味では貧しくなった。時代がそうだから仕方がないけれど。学校で酒飲んで帰るなんてできないしね。

松田小で私が宿直のとき、井上喜一郎先生が校長室から出てきて、「お、なんだ」と言って机の上に腰かけて教育についての話を始める。その時、私もいろいろと質問もした。時間の経つのも忘れていた。鮮明に覚えているのは「これから帰らなければならない、今何時だ？」、「もう朝の4時です」、「なんだ、早く言わないか」と言って自転車で家に帰られた時のこと。その数時間後、始業前にきちんと学校に来て何も無かったような顔でいた。

私が井ノ口小の校長になった時、一度朝までやってみようと思ったが出来なかった（笑）。ただし、校長室が先生方同士の研究の場になり、校長室の黒板が書き込みでいっぱいになったりしたことが日常的になった。そこまでしないと「子どもに関わる具体的な仕事をした」という充実感を感じなかった。それは井上校長から教わったものだと思う。

④「農村地域社会学校」としての福沢小

須田：戦後も常会をやっていたと思うのですが、息苦しさは無くなっていたのでしょうか。

松本：親と子どもが同じ部落公会堂に集まり、地域担任教師と親が集まっていろんな話し合いをしたのだけれども、雰囲気としてどうだったか。あまり記憶にはない。

須田：司会も含め、子ども同士で行われたのでしょうか。

松本：地域別で子どもだけ、校庭でやった常会もある。

須田：『農村地域社会学校』を読むと日々の生活態度を見直すような話し合いがなされたように読めるのですが。

松本：地域社会とのつながりで、はっきりと印象に残っているのは、福沢の親にはあったかい雰囲気があったこと。だから、学級行事をやるときにも親が

本当によく手伝ってくれた。

須田：それは親子常会で先生方と顔を合わせているからでしょうか。

松本：そう、割合に垣根がない。福沢には大きな銀杏の木があり、あの実はいい値で売れるということで、学級費にしようと銀杏拾いと出荷の作業をしたことがあった。銀杏は手がかぶれるとひどい。そういう大変な仕事にも親は集まってきてくれて、一緒にやってくれる。なかには、「子どもにそんなことまでやらせるとはとんでもない」と不満をもつ親もいたらしいが親同士で話しあって納得していた。担任の自分は知らなく、後から聞いたほどだった。

須田：農村という部分での付き合いの深さがあったとも思う。NHKの「教師の時間」で浜田陽太郎先生が、福沢は地域柄として報徳がよく残り、子どもが働くという姿が残っていて生活を土台とした教育がやり易かったと話していたのだが、松本先生が赴任されたころの福沢小の印象はいかがでしょうか。あまり報徳と言わなくなっていた時代でしょうか。

松本：あまり聞かなかった。時代が変わったのか。子どもが田んぼに行き手伝う必要がなくなっていった。機械も入ってきているし。かつては農繁休業があったが、そんな必要がない。農家をやっていない子も増えてきていた。

須田：福沢小学校の学級経営・学校経営の上でも報徳の教え、とはあまり言わなくなっていたのでしょうか。

松本：あまり言わない。善種金の説明をするときに触れるぐらいだった。

須田：湯山厚氏から、米山要助校長から奥津重輝校長、井上喜一郎校長、宇佐美安雄先生（後に桜井小学校長）と報徳を受け継いだ流れがある、と伺ったが、井上先生は報徳を語ることはあったのでしょうか。

松本：あまり報徳の話は聞かなかった。

露木：井上喜一郎先生はどなたに一番影響を受けたのでしょうか。なんであんなに哲学を。

松本：思想的には河合栄次郎の影響を強く受けている。哲学者・経済学者。あとは福沢諭吉か。要するに空理空論ではなく実学志向だった。

⑤井上喜一郎の教育哲学

写真 3 福沢小第11代校長・井上喜一郎

※福沢小学校『開校百周年記念誌』2001年

須田：福沢小と松田小でどのような教育理論の連続や発展があったのでしょうか。

松本：井上校長の教育哲学の根底にあるのは、いわゆる「主体的必然性」だった。言葉が分かりにくいのだけれども、子どもが「何を必要としているのか」、その必要とするものを自分で調べたり、人の話を聞いたりして、自分のなかで組み立て直して新しいものを生み出していく。そのプロセスに「主体的必然性」がある。理科でも社会科でも、子ども同士がいろいろな話し合いをしたり、一つの教材について「私はこう思う」とやり合ったりする時に、必ず「ズレ」が生じる。そのときに「待てよ」と自分や友だちの考えを見直す。もう一度資料を見直そう、というきっかけになってくる。だから「今、子どもが何を必要としているか」それを見極めることが授業の前提になる。

一人でいたのでは、本当の意味の「これが必要なんだ」というのが生まれてこない。だから集団が必要で、集団の中でそういうものが生まれてくる。だから学級をそういう雰囲気に創り上げていくこと、逆に集団がそういう雰囲気をもって授業を活かしていく。学級経営と授業とは別々ではなくて同時相即で、お互いがお互いを育てていく。学級経営上、そういう関係づくりを随分大事にしました。

松田小では、特に私が感じたのだけれども、研究発表会をやるということが前からわかっている、その時は少なくとも二学期の後半、社会科を発表するのだけれども、社会科と同時に国語も算数も理科も体育も、同じように大事にして一生懸命に指導した。社会科の授業を公開するのだから社会科だけ一生懸命にやり、

他の教科を軽く流すようではだめ。だから掃除の時間も他の教科の時間も同じ。掃除の時間もとくに方々をまわって、スコップを持って一緒にやったりして、そういう生活の中ではじめて社会科の授業というものがよくいく。それは自分の経験から学んだこと。

私が校長になった井ノ口小で、研究発表会をもつにあたって、先生方にもそれを要求した。発表する時に国語をやるという人もいて、理科、社会、算数もいる。「国語だからといって国語ばかりをやっているとろくなことができないよ。やるのなら少なくとも一学期から掃除も他の教科も十全にやって、その中で国語をやるということではないと、子どもは育たないよ。子どもは部分で育つのではない、全体で育つのだ」と。えてして、子どもは部分で育つと思ってしまう。いつも子どもは全体として育つのだから、学級経営は本当に大事にしました。

須田：上大井小の山崎先生から、松本先生と井上先生の指導は一貫していて「15分の掃除に全力を尽くす」、松田時代は学校全体がそういう雰囲気だった、と伺ったことがあります。

⑥研究者との関わり

須田：松本先生が福沢小学校に在職中、どなたが指導者としていらしていたのでしょうか。

松本：私が知っているのは、重松鷹泰先生、長坂端午先生、上田薫先生、浜田陽太郎先生ですね。研究発表会で講演されるわけだけれども、重松先生、上田先生ふたりから「子どもの事をよく見て居られるなぁ」と感銘を受けた。当時、戦後社会科が華々しい頃だから、教材論が幅を利かせていた。ところが重松先生や上田先生は徹底して「子どもはどうなんだ」と言う考えが根底にあった。実に子どもをよく見ていらっしゃるという感じを受けた。

須田：毎年研究大会に来られたのですよね。

松本：その時に研究物をはじめて渡すのだけれども、講演のなかにその内容や当日の授業の様子が取入れられている。大学の先生には事前に講演内容を用意する人がいるが、それとは違うからこちらもものすごく緊張している。だけど短い時間で的確に捉えて、全体化している点に感銘を受けた。私も何度か取り上げられて、「やった」と宙に舞うような思いで感激する。あれも一つの教師の育て方かなと。

⑦授業研究について

松本：若い人を育てるのは、「おれが教えてやる」、というのでは絶対にだめ。指導案を一緒に作る。こういう教材を使いたい、子どもはどういう風にみるのだろうか、と予想する。そのとき、指導案を作ると言うことは教材と同時に子どもを見ていることになる。この子はどうだろう。教材研究であると同時に子どもの研究。一緒に知恵を出し合って作ったら、出来上がった時には先輩や、校長から教えられたのではなく、「一緒につくった、俺が作った」と納得感がある、それがいい授業になるとものすごく自信になる。だから授業研究のときにすすんで「私がやる」と言わないような人は、そういう経験がないからだと思う。それは大事なことだね。

露木：東京都や相模原もそうだが、教員養成をがんばっている。その発想はとにかく「若い人はこれを覚えなさい」という体制を造ろうとしている。仕込んでいく。あれじゃうまくいかない。

須田：若い人の力を信じていかないと。

松本：社会科の初志の会の支部である「土曜会」では、徹底して授業記録をもとに子どもの姿を考えてきた。そこでの討論を通して「口八丁手八丁」を大事に育ててきた。口八丁というのは理論的な武装、手八丁というのは具体的に授業を意味のあるように展開できる力量。その両方を育てようと心掛けてきた。

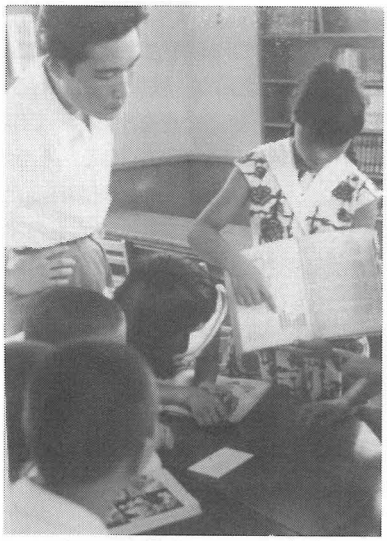
須田：土曜会の授業検討のスタイルは、松田小や福沢小にもあったものですか。

松本：福沢小にはなかった。毎年研究発表をやったけれども、その中で授業記録を載せて検討して分析して、とやったのは私が初めてだった。あの時、トランクみたいな大きなテープレコーダーで録音し、家までもってきてそれを起して記録した。私は福沢小学校の研究報告書に、教師にとって都合のいいところだけ載せているとの不満をもっていた。子どもの作文も教師のストーリーに合わせて都合のよいものを載せている。それはおかしいだろう。そんなものではない。そう考えて授業記録を収めたものが、福沢の研究紀要に出ているはずだ。

須田：「実力の検討」シリーズですか。

松本：そう。思うようにならないところがある、それを率直に出すべきだ。そこから新しい理論を生み出そうとした。

写真 4 松本健嗣氏の授業風景



※福沢小学校蔵、1959（昭和34）年

須田・露木：今日はありがとうございました。

3、松田小時代の井上喜一郎校長

（1）解説

井上校長との出会いは研究授業の場での痛烈な批判であったという小林清氏は、やがて松田小で実力を見出され、井上校長退職までの間、理科主任として、前出の松本健嗣氏と共に理科・社会科の両翼にわたる実践研究を支えることになる。そして後に、日本初等理科教育研究会（理事長）にも活躍の場を広げていった人物である。

小林氏が回顧する松田小時代の井上校長は、戦後新教育や経験主義が批判され、系統主義的な学習を重んじる方向へと教育界が舵を切っていた時代に、「社会科の初志をつらぬく会」の幹部として独自の教育理論を追究していった姿である。提灯学校だったという回顧からは、福沢小時代と変わらないスタイルを貫いた井上校長の姿を窺うことができる。

先述の松本氏の聞き取り調査にあった「主体的必然性」、つまり子どもが話し合いの中で既存の知識・認識と他者・社会・自然との「ズレ」や「矛盾」に気づき問題解決に進んでいく授業イメージを、「知識は動くものだ」として理論化していった。そこで用いられた「可動的均衡点」というキーワードについて、まさに実践創出の現場にあった小林氏から、当時の学習指導要領改訂や井上校長の弁証法を援用した理論形成、その三段階の在り方に至るまで丁寧な解説を頂いた。

（2）小林清氏への聞き取り調査

日時：2010年11月13日
場所：話者自宅
聞き手：須田将司、一寸木肇（当時：上大井小学校長）

①井上喜一郎との出会い

小林：私と井上先生との出会いには、人生ってそんなもんかとつくづく感じさせられるようなことがあった。私は最初、岡本小学校に赴任した。戦後の混乱期で衣食住がままならず、教育なんてことは二の次三の次。そういう時代だったから、私自身も神奈川師範の特別研究科に行かせてもらい、助教という立場で現場に出てきた。だから、先生の卵といっても今日考えられるような、そんな資質をもったものではなかった。

社会全体、憲法すら、その基本が全く変わった時代。何が国家目標なのか、教育目標なのか、ちんぷんかんぷん。井上先生が福沢で新教育の社会科にいち早く着手された。当時どこの学校研究も社会科だった。特に周辺は、私がいた岡本小学校でも、井上先生や福沢の先生を講師に呼び研究授業をやった。

たまたま私の番が回ってきた。今でも鮮明に覚えているが、4年生を受け持って「郵便局」の単元をやった。ちょうど近くに郵便局があるから、子どもを毎日連れて行って、郵便局の仕事を一週間かけて調べさせた。井上先生に指導を受けるというので、各班の発表会を研究授業にあてた。内容は十分、教室の隅から隅まで、班で調べたことを模造紙に書いて貼った。それを順に発表。僕は各班でばらばらに調べてきたことをまとめて、郵便局の仕事を統一して全員に把握させることに目標を設定した。

午後の検討会。校長は田中俊郎先生（私の小学校の恩師で、私を助教で呼び、目をかけてくれた人）。「小林先生は研究授業は初めてだ。経験もまだ少ないし、しかし寝ずっこでやってきた、とにかく一生懸命授業を展開できた、ひとつよろしく」と挨拶して始まった。通常、校内の先生から質問や意見などが出るものだが、開口一番、井上先生が「今日の授業は…、やらなかった方が、子どもが伸びたんじゃないかな」と言われた。高名な福沢の校長が。

田中校長がいくら「寝ずっこでやっていた」と援護してくれるが、みんなシラけちゃって検討会にならない。それで僕の分はおしまい。若者の私の気持ちはどう？「なんてひでぇ校長さんだ」となるべく顔を合わせないように、ちらっと見えたら目を合わせないようにして。社会科はそんなに関心がないし、自分は理数科だと決めちゃっているわけで。それで算数に取り組んだ。

つまり、地域に根ざした教育と同時に、教育思想としては経験主義、体験主義。現在の生活科と似ている。ところが戦後徐々に安定してくると学力が問題になった。何をやっていいか、教員自身が目標をもてない。「野球ばかりがつよくなり」という批判が当時の教育界を象徴していた。学力低下と道徳教育の欠如が問題になり、昭和33（1958）年版学習指導要領では「試案」の文字が消滅した。教育内容の系統性重視が求められる。この33年版の意味はものすごく大きいと思う。学力の向上、教科内容の系統性、それから道徳教育がにわかに位置づけられた。井上校長の経験主義基調の社会科にも地理・歴史の知識重視の色合いが見られるようになってきた。

経験主義が否定され、系統的な地歴教育の復活などが言われ、一時は隆盛を極めた福沢教育が批判的にみられる状況になってきたとき、井上校長が福沢小から松田小に転任されてきた。私は逃げてばかりいたのだが、先に松田小に赴任していたから、そこに井上校長が来たことになる。「こいつはまずいな」と（笑）。

当時は管理職の人事は9月。私は井上校長が来た時に松田小在職が9年半であった。当時の申し合わせかどうか、永年勤続は10年となっていて、私ももうすぐ10年になる時期だったので井上校長に転任希望を申し出た。そうしたら「ふ～ん」とただそれだけ。やがて2月のおしまい頃かな、僕が「校長先生、転任先の学校、いいところがありましょうか」と尋ねたら、「もう一年いてみないか」と。半年間の仕事を見ていたわけね。あとでわかったのだけれども、井上校長は感情的にものを言う人ではない。僕は岡本小学校での出来事で、井上校長は「この若造、なにやってんだよ、人を呼んでおいて。そんならやんなきゃいい」と言ったと捉えたわけ。ところがそうじゃない。若造だとかそうじゃなくて、本当に研究という立場でものを言う人だった。「もう一年一緒にやらないか」と言われると、「認めてくれたのかな」と思う。「では、ひとつよろしくお願いします」と。そして翌年、「もう一年やらないか」と。その次の年、「俺が終わるまで一緒にやらないか」と。そんなことがあるものかなと思ったけれども、僕からすれば認めてもらっているように思えるので「よろしくお願いします」と。そうしたら、もう次の年は言われなかった。そして本当に退職まで一緒だった。僕は全国的に有名な校長さんに指導されるなら、と夢中になって。自分は理科系で「数教協」、「科教協」、算数は水道方式の遠山啓さん、「科教協」は当時国立研究所にいた板倉先生…。

一寸木：その先生は仮説実験授業の提唱者ですね。

小林：そう、仮設実験授業。そういうものに興味があるから、会員にはならなかったが雑誌を読んで研究はしていた。そこへ、井上校長は、「初志をつらぬく会」で上田薫先生を中心にした全国組織を作って、経験主義が否定されるがそうではない。知識は生産されるものであるという主張の研究集団の幹部として活躍された。

②松田小での研究

小林：井上さんは校長室におられるときに、うろうろ、うろうろ、手を後ろに組んでそこら中をのっそりのっそり歩きながら。それが考える姿として今でも鮮明に覚えている。机に向かって頭を抱えて考えるのではなく、やや上向きに頭をあげて、ぐるぐるぐるぐる。窓越しに見えるわけ。「さて、これから松田をどういう方向にもっていくか」ということで相当に想いを巡らせている様子が見て取れた。

当時、教育の科学化ということで井上さんは考えた。理科と社会を結びつける一つの論理を、同じ「科学の追求」だと。それで翌年から、理科と社会科の比較研究で出発した。追求する子どもの姿勢も同じはずだと。

つまり昭和33年版で道徳が入り、系統性が重視。昭和43（1968）年版ではさらにそれを一歩高めて思考力を伸ばそうとする問題解決の力を高めようという方向性が出されていく。そこに松田小の研究は「弁証法」を持ち込んできた。その理論の根底にあったのは哲学者武谷三男先生[14]の現象把握・実態把握・本質把握という認識の三段階理論。教育書として出されたわけではないから、非常に難解だった。それを井上さんなりに、発想の基にして、授業に当てはめることはできないかと考えたのだろう。理科の授業も社会科の授業も同じこと。つま

り現象そのものを把握して、「どうしてだろう」と疑問が出てきて、分析していく。そして最後に本質的な、本時目標に到達すると。そういう三段階理論を井上さんが提案されるから、実践は現場の僕ら。僕は理科で果たして三段階でうまくいくかどうかの実証研究をした。ほとんど毎週、研究授業。だからといって理科だけではなくて、僕も社会科の研究授業をやった。そうじゃないと統一性が出てこないでしょ。全員が両方やるから、これはものすごい研究活動になった。校長も、事前研究で社会科なら当然だが、理科でも指導案の盲点をちゃんとついていた。「こんなことをやっても、子どもはあっと思わないぞ。こんなことをやったら」と、実践的に指導されるわけ。今思えばものすごい。それで出来上がったのが「松田小方式」だった。

大まかにみると、現象を把握する、分解して考える、それを実態的構造的把握といった。そして最後の結論に至る三段階方式。スパイラルに授業が進んでいく。そのスパイラルになるこっちからこっちに行くときに、「おや、おかしい、変だぞ、本当にそうか」。つまり子どもの自己矛盾。矛盾という言葉は強烈に思うけれども、自分自身で湧き出る自己矛盾もあれば、多くは「あの人が言った、え、そうか」と集団の中での矛盾もある。それが矛盾を核にして展開されていく三段階理論の「松田小方式」であった。社会科も同じような、国語も同じような、音楽も同じような。要するに追求という立場に立ったらば、簡単にいって導入―展開―終末だもの。ただ単に教えるのではなく、子どもの方から「おかしい、じゃやってみよう」という方向を大切にした。だから「矛盾を核にした問題解決」という名前をつけた。「弁証法」というのは矛盾による発展過程だからね。これ（井上喜一郎、松田小学校『理科・単元構成の改善と指導：実在・現象から質的な発展へ』明治図書出版）は1969（昭和44）年に発表したもので私も書いている。

一寸木：蛯谷先生指導の。

小林：そうそうそう。蛯谷さんは当時の教科調査官だった。井上校長が、「松田の研究で理科は誰を指導者に招いたらいいのかな」と僕に相談された。井上校長の前任校の社会科研究の指導者・上田薫先生にしても、小林信郎先生にしても教科調査官。教科調査官なら筋が通るから、「蛯谷先生が有名です」と。それで指導に来てもらうことになった。

一寸木：蛯谷先生は松田に来られているのですね。

小林：ずっと。私が三段階理論の研究発表すると、「弁証法」といったら真っ先にその言葉がダメと言われた。文部省では「弁証法」を出すのはソビエト学派とみなされてしまう。今もこの言葉はご法度。

須田：今もそうなのですね。

小林：アレルギーのようなものだ。蛯谷さんは、研究発表会で全員の前で「そこは違いますから」と僕に指摘をした。けれども、現場の先生方は授業を見ているから、言葉がうまく合わなくても、ああいう授業は子どもが夢中になって取り組むと目に見えてわかるから納得できていた。

一寸木：今は「矛盾」という言葉は違和感なく使われていますよね。

小林：当時の「矛盾」というのは例の哲学的意味ではなく、子どもの内部に起こる食い違いといった言葉で表していた。それは日常の中でいっぱいある。集団だから食い違いはしょっちゅう出る。その食い違いを核にして学習を推し進める。それが松小方式の根底にある。難しい言葉がいっぱい使ってあり、なかなか浸透していかなかったけれども（笑）。

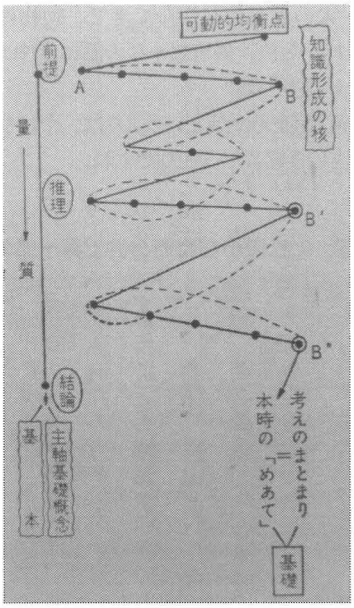
須田：食い違いですか。

小林：食い違いですよね。それを子どもの「矛盾」という言葉で言い表した。井上さんは難しい言葉をやたらと、「可動的均衡点」など。

一寸木：その「可動的均衡点」を最初に発したのは誰でしょうか。

小林：最初に発したのは井上さん。やっぱりそうです。「可動的均衡点」の論理の根底は、知識の定着化とか構造化に関する独自の見解。定着化や構造化とは、子どもにどういう構造をもって教えていったら、いかに知識が沈殿しそれが定着するかというもの。つまり学力が定着しないのは知識が定着していないという考え方。それに対して、上田薫さん、井上喜一郎さんは「知識は動くものだ」と考えた。知識というのは一時そこに留まっているものであって、可動性を持っている。考えてみれば学者の研究もそうじゃないか。否定されて新しいものが生み出されていく。今、一時ここに均衡を保ってとどまっているに過ぎない。定着ではない。それが「可動的均衡点」。論理的に言って価値観が変わっていくのだと。社会科はまさにそのことがはっきり言える。社会環境が変われば価値が変わる。理科だっておなじことがやっぱり言える、真理だね。ところがそういう言葉を使うから、わからないわけだ。

写真 5 「可動的均衡点」のイメージ



※井上喜一郎／松田小学校『子どもに生きる授業―理科・社会科の実践的比較研究―』東洋館出版社、1968年、67頁

松田小方式は「可動的均衡点の研究」と言ってもいい。問題解決というのは、解決したけれども、それは一時の留まりだと。次の時間になると、逆にひっくり返る場合もあるけれども、深みは深まっていく。それだって変化だ。動きだ。だから、出発は「可動的均衡点」。前の時間のまとまりの中から、何か事実を導入して「あれ?それでいいのかな」という子どもの自己矛盾を引き起こす。問題設定をしなければ、それがいつまでも動いて行かない場合もあるわけ。だから先生が事象を見せる、子どもは既習の知識で見る。でも「あれ?」、問題が発生する。そして「おかしい、変だ」という矛盾が出てくる。だから矛盾というのを授業の核に据えろと。その矛盾を解決して一般化の方向へいって、「一応のまとまり」に。一応の結論ではなく、「一応のまとまり」という言葉を使っているはずだ。動くのが前提だから。これは理科だとよくわかる。社会科は、価値観を自分で持ってしまうから難しい。そこに、教師がどういう教材を、事実を用意すれば、今まで子どもたちがそれぞれの価値観の違いを持っていたけれども、「おかしい変だ」と考えるのか、教材研究の難しさがある。そこが理科と若干違うところ。でも、追究過程は全く同じ。子どもの思考というのは、理科社会だけじゃない。全教科。あるいは考えるというのはそういうことだ。理科の時間には考えろ、社会科の時間には覚えとけ、それでは子どもが分裂をすると、そうでしょう。なかなか深い。

須田：深いですね、本当に。

③井上喜一郎の研究スタイル、受け継がれた系譜

一寸木：細々と、脈々とじゃないけれども、神奈川県足柄上郡にはそういうものが残っている。

小林：当時、直接そういうふうに鍛えられた人は退職しちゃったからね。それを受け継いでいる若いのが、あなた（一寸木氏）や塚原氏、露木氏とかね。相模原市の大野小学校長の塚原氏の研究。一番若い時に一緒にやった人物で、集大成としての研究会をやっている。

　それでまた今、指導要領の改訂。僕の目で見ると振り子がこういったかと思うと今度はこっちへ動いて来る。昭和30年代の知識理解に重きを置いたものが、ゆとりと充実に来た。今度はゆとりと充実の逆の方向に動いていってしまう。大局的に見るとそんな風に見えて。松小方式の井上さんのが本質的なものだとすれば、本質というのは時間空間を超えてもそこにあるものが本質だから、子どもが追究するというときの仕方、させ方、要するに授業ね。そういうものが見直されるであろうかと。

一寸木：教案を作って見せると夜遅くまで論議をして、酒飲みながら論議をし、その翌日、新しい教案が井上喜一郎先生から出て来ると。そういう話を聞いたことがある。井上先生は体が弱かったのですか。

小林：そうです。若い時分は。結核で療養休暇をとっているはずだ。松田にいたころは、大丈夫。夜中まで（飲むジェスチャー）。普通、よもやま話だけれども。専ら、飲みながら研究の話。

一寸木：僕らが教員になったころは学校で飲むのはそんな珍しいことではなかった。放課後飲むなんてよくあった。

小林：それが普通だもの。車社会になって無くなったけれどもね。

須田：飲みながら研究討議をし、しっかり研究も高まっていくと。

小林：そうです。飲むつまみが研究に関わることだから（笑）。

須田：井上校長先生の指導で特に印象に残っていることはありますか。

小林：研究授業の批評会で、私は長いこと研究主任やっていたが、研究主任が黒板に全部分類をして、

教材、素材はどうであったか、黒板に書いてまとめるわけ。それは苦しかったね。授業も苦しかったけれども研究会をそういう形でまとめていくのは大変だった。なんといっても印象に残ったのは、「俺が辞めるまで一緒にやらないか」と。はじめが始めだから。

一寸木：一刀両断が一蓮托生になったわけですね。

小林：まさに、教育人生が変わったね。井上さんとの出会いがなかったら、とてもじゃないけれども初等理科の理事長をやることはなく、方向違いのことをやった、例の科教協の方を。

④松田小学校時代のエピソード

一寸木：井上先生が松田小に来てから報徳教育の話とか、福沢小の話とか。とくに福沢小では芋こじ、などやっていましたけれども、そういう話はあったのですか。

小林：特に二宮先生の、ということに限定はしないけれども。思い出のひとつに、当時は朝会が毎日あったが、校長の話が長いから貧血を起こして子どもが倒れる。戸外の運動場ではだめだ、講堂（今の体育館）なら屋根がついているからそこで朝会をやるようになった。大体30～40分。しかも1年生から6年生までででしょ。5、6年生を中心に話をもっていきたいのだけれども、飽きてしまう。子どもも倒れる。そこで、来年度は学校予算を、優先的に講堂へ長椅子を入れるのに使う。当時800人ぐらい、4～5人で座れる長椅子を本当に入れた（笑）。全部座らせて「今度は倒れるのはいないだろ」と（笑）。強烈だった。

一寸木：話は「矛盾」とかそういう難しいのではなく。

小林：そう。金次郎さんも特には入れなかった。

須田：芋こじというのは。

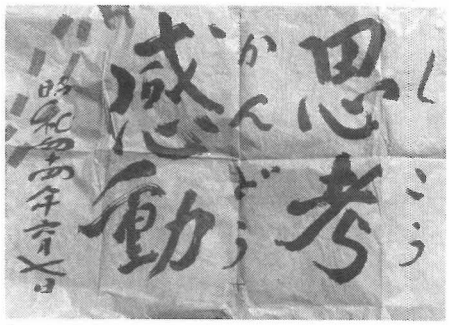
小林：芋こじの話は教員にはした。家庭教師をつけてマンツーマンでやれば子どもが磨かれると考えられている。しかしそういうものではない。子どもというのは、芋こじで、お互いにぶつかりあいながら磨かれていく。それが教室というもの、集団というもの。集団の中で磨かれるのだという芋こじ論ね。それは現職教育で僕らは聞いた。専ら使ったのは、難しい言葉をね。奥さんの関係かな、奥さんはクリスチャンではないけれどもキリスト教に対してはかなり本を読んでおられたのですね。その言葉をもってきて、それをお話しされた。

一寸木：朝会は毎日でしょ。

小林：講堂に入ってからは週2回になったのかな。猫の話や犬の話を持ちこんできて。動物は多かったね。それから孫。美可ちゃんの話は年中でてきた。かわいい盛りでね。

一寸木：直接研究の話というよりは、やはり一般的な朝会の話という感じだったのですね。

写真 6 松田小在職時の井上喜一郎の書



※井上喜道氏蔵、「思考感動」1969（昭和44）年6月7日

小林：先生方は一生懸命メモをとっていた。何を校長が言っているのかということを、教員は勉強しろという、そういう姿勢。

須田：それだけ校長自身の直接的な問いかけ、話しかけを重視したのですね。絶対に譲らない、という研究会などあったのですか。

小林：それは、そうですね。納得がいくまで。なるほどと思うことを言われるから、何の反論もなかったね。そうだなと言うしかない。井上さんは授業中でも、トントンと扉叩いてね、子どもは自習させとけ、と。それで廊下で「今度の研究会こうしようああしよう」と。しょっちゅうそんなこと。逆に言えば信頼をされていたというか。それは今見たら異様じゃないの。わざわざ教室まできて、自習させて、廊下で話して。

須田：福沢の時代から一緒にやってきた大学の先生を呼ぶことはあったのですか。

小林：ずっと通して来て下さっていたのは文部省の教科調査官である上田薫先生と重松鷹泰先生。こちらから「松田の教育を批判する」というテーマで講演いただいたことは一回だけあった。でも別に悪いという批評はなかったけれどね（笑）。かなり成熟してから、7年目ぐらいかな。

町財政だって余裕はない時代、案内状一つでも、講師料だって大変なもの。全国公開の研究会

を毎年、よく工面したなと言われた。井上校長退職の年には研究会を三日やった。理科が一日目、社会が二日目、三日目が全教科。僕が理科、社会科は松本さん。教室に入りきれないから一教室の机を講堂にセットして。

須田・一寸木：今日はお忙しいところありがとうございました。

おわりに

井上喜一郎校長を軸に、戦後新教育「福沢プラン」の前後にあった報徳教育、そして「主体的必然性」から「可動的均衡点」（松田小方式）に至る授業論としての深まりについて聞き取り調査を行った。そこに、子どもの話し合い学習の在り様や意義を追究し、教育実践・授業論としての深みを見出そうとした井上校長と教員集団の姿があったことが浮かび上がってくる。

戦前・戦後の教育実践は、皇国民錬成と民主教育または経験主義と系統主義など、断絶や対立の構図で語られることが多い。それが変化（または「改訂」）や論議として、当事者を悩ませたことは事実であろう。だが、それに対し「適応」や「変化」のみではなく、（独自の）「深化」という向き合い方も存在することに気づかされる。報徳教育から戦後新教育を経て「可動的均衡点」に至る道筋のさらなる詳細な検討が今後の課題である。

【付記】本稿は、科学研究補助金（H22-24年度、若手研究（B）課題番号22730628「昭和前期における地域社会学校論の形成史研究」）による研究の成果の一つである。聞き取り調査にご協力を賜った湯山厚氏、小林清氏、松本健嗣氏、露木和男氏、一寸木肇氏、そして資料閲覧・活用にご協力を賜った井上喜一郎ご子息・井上喜道氏、現福沢小学校長・米山和男氏にこの場を借りて深謝の意を表したい。

---

1. 拙稿「昭和戦前期における福沢小学校・国民学校の報徳教育」（『地方教育史研究』第33号、2012年5月、83～104頁）。
2. 武藤正人氏と共著の拙稿「戦後福沢国民学校における報徳教育の再評価」（『東洋大学文学部紀要』第65集教育学科編ＸＸＸⅦ、2012年2月、39～59頁）。
3. 石山脩平指導福沢小学校編『農村地域社会学校』、金子書房、1951年。神奈川県足柄上郡南足柄町立福沢小学校『「わかる」ことの追求』東洋館出版社、1960年。
4. 井上喜一郎／神奈川県松田小学校著として3冊の書籍がある。『子どもに生きる授業―理科・社会科の実践的比較研究―』東洋館出版社、1968年。『理科・単元構成の改善と指導　―実在・現象から質的な発展へ―』明治図書出版、1969年。『社会科の本質にせまる単元構成と指導―のりこえて行く子ども・授業における矛盾と統一の研究―』東洋館出版社、1970年。
5. 前掲『「わかる」ことの追求』、316～327頁。
6. 宇佐美ミサ子「座談会戦後教育の回顧 - 福沢小学校 -」（南足柄市史編纂委員会『市史研究あしがら』第四号、1992年2月、1～26頁）。この間、井上喜一郎の記念誌が3つ作成されており、そこに関係者の寄稿が多数ある。これらは注10の研究にて詳細に検討予定である。
7. 加藤フク氏の回顧録は、前掲の武藤正人氏と共著の拙稿「戦後福沢国民学校における報徳教育の再評価」に所収。
   露木喜一郎氏については、以下の4点がある。
   ①神奈川県教職員組合編『神教組四十年史』、1990年、727～728頁。
   ②神奈川県立栄養短大教授・草間俊郎による1990年11月13日の聞き取り調査「神奈川県教育関係者に聞く　露木喜一郎先生聴聞記録」、南足柄郷土資料館蔵。
   ③小田原市史編さん専門委員・金原左門による1995年2月20日の聞き取り調査「福沢プラン生活カリキュラムの周辺」（『おだわら―歴史と文化―』第13号、小田原市役所企画部市史編さん課、2000年、24～31頁）。
   ④筆者による2003年8月28日の聞き取り調査、拙著『昭和前期地域教育の再編と教員―「常会」の形成と展開―』東北大学出版会、2008年、296～308頁。
   なお福沢小学校開校100周年記念事業実行委員会『開校百周年記念誌』2001年で、加藤氏は戦前の報徳教育（24頁）、露木氏は戦後の「福沢プラン」（30頁）を回顧、寄稿している。
8. 南足柄郷土資料館蔵、南足柄市史編さん室「現代教育聞き取り調査」1991年8月1日。湯山厚氏への聞き取り調査記録。
9. この視点に立つ先行研究として影山清四郎「福

沢小学校・松田小学校の社会科(I) ―教科としての社会科の確立―」(『横浜国立大学教育紀要』第36号、1996年、29～42頁)がほぼ唯一といってよい。

10. 井上喜一郎ご子息・井上喜道氏のご厚意により未発見資料を多数確認できた。これらは2013年中に『戦後新教育・「実力の検討」実践資料集』(不二出版)として刊行予定である。
11. 湯山氏自身の実践に関しては村田栄一氏との対談記録「生活綴方と演劇の握手、主人公は誰だったのか」(村田栄一編『いま語る戦後教育』三一書房、1996年、85～100頁)がある。
12. 佐々井信太郎は1901年に神奈川県立第二中学校(小田原中学)へ赴任、その後1923年には大日本報徳社副社長に選任。加藤仁平は報徳教育研究者で『新興報徳教育』同文書院、1938年がある。下程勇吉は教育人間学の立場から尊徳に着目した『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園出版部、1965年がある。
13. 松本健嗣『「未熟もの」としての教師―失敗から学び続ける―』農山漁村文化協会、2009年。
14. 武谷三男(1911―2000)。素粒子論の研究とともに、自然認識の三段階論や独自の技術論を唱えた人物。『弁証法の諸問題』理学社、1946年。